

岩屋だよりー6号

2012年（平成24年）2月吉日

- 遅ればせながら、新年明けましておめでとうございます。今年も1年、この「岩屋だより」の愛読を含めて、よろしくお願ひ致します。

と、申しても古来より我が国は太陰曆を長く使用、それは現在の太陽曆と異なり月の満ち欠けで季節を区切っておりまして。

その太陰曆でいえば、正月は去る1月23日（月）、中国などでもこれに合わせて民族大移動、長期休暇を取ったりして故郷に帰省します。

身近な行事としては、今年第19回を迎える長崎ランタンフェスティバルもこのいわゆる旧正月に合わせて、1月23日から2週間の日程でスタートしました（しかし、長崎の華僑の方々などは、そのずっと以前から、この旧正月を人生の大切な節目として、親族らで祝っていた伝統があることを、特に長崎在住の人は忘れてはいけません）。

ついでながら、五島などの漁師集落でも月の満ち欠けが生活の大事なサイクルの要因で、「月夜間」（つきよま）と言って満月の時はイカ漁のための獲物を寄せる集魚灯を船上でいくら焚いても、海面一帯が満月で明るいのでなかなか獲物が漁船のところに集まらず捕れにくいため漁を休んで、この時に合わせて村の祭りなどをしていました。

- さて、我が北星館も2年目を迎えます。

2年目が最も組織が発展する上で大切と言われます。そのようなことも含めて、また1年間会の運営のために尽力されている役員のみならず、一般・幼年部会員約50名の方々、よろしくお願ひします。

いつもということですが、技と心は常に一体のものです。武術とともに心を磨くことが武道と言われます。

その心を磨くのが一番むずかしいのかも知れませんが、ふっと思う時があります、年齢とともにだんだんいわゆる「がんこ」になるのではと、ふっ思うのは筆者だけではないかも知れませんが。

先月ある高名な方のご母堂様の法事に行ってきました。そのご母堂様は御歳97歳で逝去されたのですが、亡くなる少し前まで頭もしっかりされていて、入院している病院のスタッフ誰にでも「ありがとう、ありがとう」と言って感謝しておられたそうです。

その高名な方はご長男になり今75歳、「自分が3歳の時おやじは戦死した」と、さらっと言われ「その時、自分の弟はまだおふくろのお腹に入っていた」

と・・・

おまいりが済んでご自宅を辞して考えました、ざっと計算して昭和14年頃お父様は亡くなっており、つまり日本が大陸進出を目指していた激動の時代、まだ太平洋戦争前の日本と中国の不幸な戦争の時代、そういう時代を生き抜いて来られたお母様だったのです。

そのご母堂様が逝く前まで誰にでも感謝の言葉を言われていたと聞き、自分もそのような穏やかな終生を迎えたいものだと思つづく思いました。

そのご長男の奥様がまたよくできた方で、葬儀の時は「お母様がもう一度短かった結婚生活を惜しむかのように、棺桶の中、花嫁衣装のような和服や花々で飾って見送った」と、言われていました。